

令和元年度 第3回 知事広聴「平太さんと語ろう」 記録

【日時】 令和元年 10月8日（火）

午後1時30分～午後3時30分

【会場】 下田市民文化会館

1 出席者

- ・ 発言者 下田市及び南伊豆町において様々な分野で活躍中の方
6名（男性3名、女性3名）
- ・ 傍聴者 110人

2 発言意見

番号	分野	項目	頁
発言者 1	防災	防災 Duck を使用した減災活動	3
2	漁業	洋上風力発電計画の漁業への影響、資源保護	5、24
3	地域活動	地域でのボランティア活動	8
4	権利擁護	市民後見人育成の取組	10
5	地域振興	地域おこしのためのイベント企画	15
6	産業振興	地域産業振興の取組	17
傍聴者 1	—	中国資本の土地買占めへの対応要望	26
2	—	地産地消エネルギーの取組の要望	27
3	—	伊豆縦貫自動車道への反対意見	29

【川勝知事】 どうもみなさま、こんにちは。実は昨日から下田に入っております、今賀茂地域局があるところが私の知事室になっております。移動知事室といいまして、知事室というのは県庁の東館の5階にあるんですけども、ドアを開けっ放しにしてありまして、誰が来てもいいと、来るものは拒まないと、来られるほどの人はきっと何か困ってることがあるに違いないから、助力を惜しまないと、決して見返りは求めないと、そういうことでやってるんですけど、なかなか敷居は高いようですね、なるべく外に出ようということで、こうした形で、広聴会というのをやっているわけです。この広聴会は、私がこういうことやってますということを言う場ではありませんで、広く聴く会ということで、お聞きした中身をですね、もしお困りのことがあれば、それは、できる限り一緒に解決していこうと、そして、何かすばらしいことされてるってことであれば、これをいろいろ広く、県の方にPRしていこうというふうなことですね、市民町民、県民の皆様方からの、御意見を広く聴く場でございます。それから、時にこの言いつ放しっていうのがままた見受けられたりしますけれども、それは今まで60数回、一度も聞きっ放しはありません。もちろん私自身がよく聞いておりますし、それから意思決定者を常に伴っております。関係者もたくさん来ておまして、この場でお答えできないこともございます。それは持ち帰って必ず後日、お答え申し上げるというふうにしてるわけでございます。

今全体として伊豆半島に対して追い風が吹いていると思っております。昨日は、蓮台寺の方、しだれ桃も見せていただきまして、地域の人達が始められた、それぞれの種から栽培したものが、今たくさん木になりまして、桃源郷作りをされてるわけですね。それを見たり、また戦前期は国宝、今は重要文化財でございますけれども、大日如来を拝顔させていただいたりですね。それからこの8月にリニューアルオープンいたしました、ザ・ロイヤルハウスですか、あのロープウェーですね、乗せていただきまして、上に上がって、あまりに立派なのですね、びっくりしました。前に来てるので、本当に同じ所かと思ったぐらいです。なんか靴脱がなくちゃいけないんじゃないかと思ったぐらいで、またかつカレー、千円だそうですけど、美味しかったですよ。いやパンケーキもうまかったですね。びっくりしました本当に。非常に高級感のある所ができて、まだ皇室は御利用されてないってことですけども、誰に見せても恥ずかしくないものができてますね。そのあと、実はもうぜひとと思ってました、オーシャンパークですね、南伊豆にできましたので、もう歩いて5分の所に石廊崎の最南

端のところまで行けるので、もう来る度に思いますけれども、昨日はハナカイドウが咲いておりましたが、海の神様ワダツミの声が聞こえるような感じでした。この景色はもう、海と山の風景の画廊ですね、最高だなと思いました。そのあと、竜宮窟に参りまして、結びのハート型を拝ませてくださいました。それからまたこちらの羽衣という、若い青年たちが、新しい試みを下田の街で始めてるということで、それを見せてくださいました。

そんなことでですね、来年オリパラがありますし、ここはジオパークですし、さらにまた、県議会議員ほか、市長さん町長さんのお力添えがございまして、伊豆縦貫自動車道も滞りなく今計画通りに、あるいは若干前倒しという感じで進んでいるところがあります。いずれこれができるようになりますと、もっと多くの人がお越しになると存じます。また伊豆半島ぐるっと一周、サイクリングで周るといって、これもイタリアの人に大変人気があるみたいで、それからマウンテンバイクも、ここは上級者コースということで、今まで山道だったのが、かえってマウンテンバイクリストにとっては素晴らしいというふうに言われてるということもございまして。

そんなことで全体として、私は追い風が吹いてるんじゃないかと思いますが、それはそれとして、一方で、様々な問題があるに違いありません。今日は、ぜひですね、ここにいらっしゃる6人の市民町民の代表の方々から、貴重な意見をお伺いいたしまして、それを県政に活かして参りたいと思っております。2時間ばかりでございませうけれどもどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

【発言者1】 皆さんこんにちは。下田市消防団女性部の発言者1です。よろしくお願ひします。皆さんは下田市消防団に女性部があるのを御存知ですか。私たち下田市消防団女性部は、平成26年に9名で発足し、今年度で6年目、現在7名で活動しています。発足当初、消火活動に参加を希望する団員もいたため、火災の現場に出ることも検討されましたが、女性の感性を活かした普及活動や啓発活動をしていくことになりました。私がなぜ入団したかという点、声をかけていただいたこともあり、以前から個人的に消防署などの救命講習を受けていたのですが、さらにAEDの使い方や救命応急手当などを学び、万が一の事態の時、何か役に立てるようになりたかったからです。先日も、静岡県消防学校での女性消防団員研修会に参加してきましたが、女性部の中には、応急手当普及員研修に参加し、地域防災訓練や団員に向けての救急講習会で指

導を行ったりしています。保健師さんも4名、ふじのくに防災士、防災士の資格を取得した団員は2名います。私も防災士の資格を取得した中の1人です。

平成28年度より、幼稚園、保育所、こども園の4、5歳児を対象に、防災Duckというカードを使って、ゲーム感覚で幼児に対して減災活動を行っています。現在まで約500人の幼児に向けて活動してきました。今年度よりさらに、下田市内の2ヶ所の保育園、子育て支援センターなどでも活動を行うようになり、全部で6ヶ所になりました。これが、実際に使っているカードです。お手元に資料があると思いますが、これは子どもたちに実際に体を動かし、声を出して遊びながら学んでもらうためのゲームです。例えばこの地震のカード、こうやって出して遊びながら見せて、地震の時は「ダック」と言って、両手を頭に乗せながらかがみこむポーズをします。これから学ぶことは、地震のときは頭を守ろうというメッセージです。「Duck」というのは、「あひる」の意味と「身をかがめる」という二つの意味があるそうです。ほかには、津波の時にはチーターで、両手を速く振り、できるだけ高いところまで走ろうというメッセージや、火事ときには、たぬきのポーズ、両手を口に当て、濡れたハンカチで口に手を当てようなどのメッセージを伝えています。子ども達も楽しそうにゲームに参加してくれるので、私たちもうれしく、今後も活動していきたいと思っています。

今はこのような活動を行っていますが、今後の活動をどうするか、検討しています。当初検討された、火事現場に出ることも改めて検討していたり、これから高齢化に伴い、認知症の方が万が一方不明になったときの捜索活動や、最近多い台風などでの漏電災害の啓発活動なども必要なのではないかと思います。先日参加した女性消防団員の研修会では、このところの各地の災害の避難所の現状を知りました。厳しい現状の中、これから女性の役割がさらに大きくなっていくのではないかと思います。避難所での声かけなど、私達ができることがあるのではないかと考えています。

川勝知事にお伺いしたいんですが、知事は女性消防団をどのように思っているのでしょうか。あと、静岡県は南海トラフ地震を想定していますが、女性消防団はどのような役割を果たしていくと良いとお考えですか。今後の活動の参考にさせていただきたいと思います。

そして、下田市消防団女性部は、現在団員を募集しています。下田市内在住か在勤の18歳以上の健康な女性で、私たちと一緒に、ぜひ私も女性消防団に入団して活動をしたいという方がいらっしゃいましたら、下田市役所防災安全課消防安全係に御連絡

ください。よろしく申し上げます。御清聴ありがとうございました。

【発言者2】 皆さんこんにちは。下田の伊豆漁協に所属している、静岡県遠征遊漁船協議会、マグロ部会というのがありまして、その会長をやってます発言者2と申します。僕は昔から海の仕事をやってまして、キンメ漁メインで、あと釣り船とかもやってますけど、ちょっと最近、ここでいろいろ耳に入ってきたことがありまして、さっき知事が言ってくれたように、ジオパークであるこの伊豆に洋上風力発電っていうのが今建つということで、ちょっと僕は頭を抱えているところがあるので、この海にそれが、下田石廊崎近辺の所から2キロ以上10キロ以内のところに風力発電が100基建つという話を聞いたので、そこでちょっと頭を抱えているところなんですけど、やっぱり伊豆の海域は霧が多いところで、船の事故も多いし潮の流れも速いところなので、なんとかそういうのを防いでいきたいなということもありまして。あと、海底ケーブルというのが風力発電によって、伊東まで海底ケーブルを引っ張るということも聞いたので、下田でキンメ、イセエビ、アワビという、魚の中にそういうものがあると、自分たちもあまり綺麗な海を荒らしたくないなと正直思うんです。それにプラスして、メガソーラーが河津、稲梓、下田を流れている川上の方でメガソーラーの建設計画もあると聞きました。その工事によって、下田港に続いている川に泥水とかも流れてきちゃうんじゃないかなという不安とかもあります。大事な、僕たちにとって綺麗な海を守っていきたいという気持ちがあります。こういう機会だったので、メガソーラーの件と洋上風力発電が心に刺さる感じがしまして、また後で知事にもお聞きいただきたいなと思ってます。これで終わります。御清聴いただきありがとうございました。

【川勝知事】 発言者1さんと、発言者2さん、ありがとうございました。

発言者1さんの方からですね、女性消防団、これはですね、消防団というのは男だっというイメージが強くてですね、私は、確か消防団の充て職だと思うんですけども、全体の、名前正確には忘れちゃったけども、団長格みたいなことをしているわけです。そうすると年に1回、全員が集まることありまして、最初の頃だと思えますけれども、静岡県に消防団員は大体2万人ぐらいいらっしゃいます。ちょっと今2万人を切ってきたんですけども、そのうち女性消防団員が1%もいなかったんですよ。200

人を切ってたわけですね。これは誠によろしくないということをはっきり言いまして、それで全体目標は一割にしてください、つまり2千人にしてくださいと言われて、首切られるかなと思ったんですけど、そのままです。そうした中でですね、発言者1さんが、女性消防団の当初からのこちらのメンバーとして活躍され、かつ、防災士の資格も取られたと。もう一人取られてるということですね、この取得率はひよっとすると、下田の消防団の男の方より多いんじゃないですか、率としてはですね。7名のうち2人ですから3割ですよ、割合にすると。大したものですよ。今は、女性の方たちにも入っていただくことができ、400人を超えるようになりました。それでも2%です。自衛隊がごさいますでしょう。自衛隊にもですね、女性の自衛隊員がいます。彼らも1割を目指してるんですが、今6%ぐらいじゃないかと思います。静岡県はまだ2%ということですね、まず、こういう発言者1さんのような、女性消防団員を増やすことですね。男には気がつかないところがあるんですね。何となく男の仕事、力仕事だと思っていらっしゃるけれども、先ほどの子どもたちにいろいろ教えてらっしゃるってことなど、それは男の消防団員よりも、こういう発言者1さんのような優しい方がですね、子どもに接した方が、ああいうゲーム感覚で、ダックとかチーターとか、やった方が、よほど子どもは馴染むんじゃないかと。

役割分担があると思うんですが、最大やって欲しいこと、何を期待するかということ、もっと団員を増やすこと、これを期待してるということです。それから女性消防団員のあなたの力で、男性消防団員の意識を変えてください。半々になるくらいやってくださいっていうふうに団長に言ってください。川勝が言っていたと。文句があるなら川勝のところに来い、あるいは川勝が来ると言っていたと仰っていただければいいと思います。そういうことで、訓練を重ねることによって、役割が自ずと分かれてきます。ですからそうした、例えば自衛隊ですと戦闘パイロット、あれはやっぱり女性に向かないそうですよ。やってみてわかるそうです。だから、いろいろやってみて、そして自ずと役割分担が出てくるということで。そうしたのは、訓練を重ねたり、あるいはこの消防団で全国大会があるんですね。そうした大会に出ることによって、腕も磨かれるし、相手の技を盗むこともできるし、そうしたことを通じて、私は全体として、防災は、社会の半分は女性ですから、一緒に守るということ、まず、この賀茂地域は下田からやって行って欲しいと思います。

発言者2さんは、実は昨日竜宮窟に行ったんですけども、そのすぐ近くで、仕事

をされているということでございますが、洋上の風力発電、これはですね、そもそも伊豆半島を何と心得てるかということ、設置しようと思っている会社の方がここにいらっしゃれば、社長に伝えてくださいと。伊豆に対する冒とくであると。ここはですね、ここ数年で、世界の財産になったわけですね、ユネスコのジオパークですから。そしてもう戦前に、川端康成先生が、伊豆序説という中で、これは南海の贈り物だと、そのとおりですね。今はもうジオパークということで、フィリピン沖にあった火山島が本州とぶつかってできたところが伊豆半島だということ、皆知ってます。今は小学生も知るようになりました。南海の贈り物だと、川端先生はこれを海と山の風景の画廊と言われていました。伊豆半島全体が一つの一大公園であると、こう言われている。海と山の風景の画廊、それを汚してはならないということですね。それから、単に風景の画廊ではなくて、そこで生活してる人がいるわけですが、その生活の一つが、例えばジオパークになったということで、観光です。観光は美しいところ、綺麗なところ、それを台無しにしては成り立ちませんから、ですからその面でもですね、生活、産業に支障をきたすと。そして、発言者2さんのような漁業者が心配してると。イセエビ、アワビ、どうなるんだと。海底ケーブルでそんなことして、いじめることになるんじゃないかと。それから100基も建てる。どこに立てるか、すぐそばに建てる。つまり南伊豆からずっと伊東までですね、海底ケーブルを引いたり、100基も建ると。かなり大きなものですね。それはここは最もたくさんのいろいろな船が往来するところではありませんか。だから危機管理は最も重要なんです。その観点からも具合が悪いし、漁業の邪魔になるということですね。往来の危険であり、さらにですね、南海トラフの巨大地震というものが想定されてるわけですが、そうしたものが起こって倒れたりしたらですね、そしてまた、仮にそれが津波でぼーんと押し寄せてきたら、被害を大きくするというので、何一つ良いことはない。だから、ぜひ、関係者の方はお伝えくださいませ。これは改めてですね、この地域について勉強し直して、ここからは撤退してくださいと。さしあたってですね、経産省の方にそういう申し出があったそうです。そうすると今、環境影響評価っていうそうしたもので審査をしなくちゃいけないと。審査を1回やりました。そしたらですね、全部ネガティブな意見ですよ。ただ法律上、できることっていうのは、できないこととできることがありますから。しかしながら、今これに賛成する人はですね、その会社の一部の推進者、つまり、1円でも2円でも儲けてやろうと思ってる方以外いないんじゃないでしょうか。単に

海底ケーブルだけじゃなくて、鉄塔を作ってですね、送電しなくちゃいけませんから、そんなものも景観にとってよろしくないと思いますね。特にワダツミっていう、海の神様が怒りますよ。昨日、石室、これを石室（いろろ）神社というそうですけれども、あそこで嵐が起こって、船頭さんが助けてくれと言って、助けてくれたら帆柱を寄付すると言って、それを忘れていて、帰りに嵐が起こってですね、あ、そうだったことで帆柱切ったら、その帆柱それ自体が石廊崎に流れ着いて、それが今あそこの神社を支えているという、そういう非常に不思議なお話を承りましたが、海の神様に対してそういう冒とくをしちゃいかんと。これはうちの考えです。

メガソーラーにつきましては、今この河津のところから、その川が汚れると。川が栄養分を運びますから、そこに汽水域ができて、様々なプランクトンが育ち、それを魚介類が食べて、豊饒の海になっているわけですね。同じようなことが伊東で起こりまして、伊東でメガソーラーですね。これ外国の企業だったわけですが、これもきちっと法令を遵守して、一々やっていくうちにですね、なかなか今厳しくなっております。あそこは八幡野川というのがありまして、非常に短いんですよ。山と海との間を結ぶ川、そのところにですね、巨大なメガソーラーを作るということで、今これは足踏みをしているところでもありますけれども、他にもこの河津だとか他のところでそういうメガソーラーを作る動きがあります。これは私は、原発事故があったと、いわゆる自然再生エネルギーの方がいいということで、一気にぐっといったわけですが、今度はそれで森を破壊され、森が破壊されることによって、山の土砂が川に流れ込んで、またそれが漁場を破壊するという悪循環になっております。だからもう、森は海の恋人であって、その恋人を繋いでる、重要なのがこの川なわけですね。川を汚してはならんということでもありますので、基本的には伊豆半島っていうのはもう今、人類の財産ですから。我々、条例でかなり厳しく、森林の破壊ができないようにしておりますけれども、法の目をくぐって、網の目をくぐってやろうとする人たちもいらっしやるのですね、そこはもう皆さんの力を、声を上げていただいて、そして不備な点は法律も改めていくという、そういう運動にしたいというふうに思っています。基本的に私はですね、発言者2さんと同じ考えですよ。皆さんもおそらく同じ考えでしょう。ここに洋上の風力発電は、合わないということです。それが私の考えです。

【発言者3】 こんにちは。南伊豆のあっそう会の代表であります、発言者3と申し

ます。私とあっそう会とボランティア活動のお話をしたいと思います。

2013年4月28日、女友達8人と食事をしていた時のことです。お喋りが尽きず、あっという間に時間が過ぎました。その時、誰からともなく、またこのメンバーで集まりたいな、そうだ、名前をつけよう、ということで、あっそう会という名前がつけました。この楽しい時間を皆で共有したかったのかもしれない。

あっそう会も今年で6年目を迎えました。当初の8名からメンバーは21名の大所帯となりました。当初は2ヶ月に1回の食事会でしたが、時間が経つにつれ、町のため、地域のため、何か役立つことはないかという思いから、ボランティア活動をするようになりました。あっそう会を始めた時の目的は、みんなで集まって、楽しい食事会をするというのが、ボランティア活動をするのと参加する人も少なくなり、存続できなくなるのではないかと、ボランティア活動を自主参加としました。しかし、自主参加といっても、ボランティア活動の趣旨を皆理解して、ほとんどのメンバーが、ボランティア活動に参加してくれております。特に観光地である南伊豆町では、2月の「みなみの桜と菜の花まつり」から11月のウルトラマラソン大会まで、いろいろなイベントが開催されており、ボランティアとして参加しております。桜まつりで行われる菜の花結婚式では、イベントの準備、片付け、ウルトラマラソンでは、受付、選手の荷物の預かり、おもてなしと、ランナーにも大変喜んでいただいております。一昨年には、桜まつりに特化した、桜まつり盛り上げ隊を結成し、観光協会に、自分たちで何かお手伝いすることはないかと考え、提案したのが、がらがらぼんでした。従来あったウォークラリーを簡素化し、お年寄りから小さなお子様連れの人たちまで、気軽に参加していただきました。青野川沿いに咲いた綺麗な桜を見てもらいたい思いから、この企画を提案しました。みなみの桜と菜の花まつり20周年の昨年は、3千人から6千人にウォークラリーが増え、今年の2年目は9千人にまで増え、南伊豆町の桜並木を多くの人に知ってもらおうきっかけになったのではないかと思います。来年は1万人を目指したいと思います。

また、11月のウルトラマラソン大会では、早朝5時から夜8時まで、3ヶ所のエイドを受け持ち、おもてなしの準備をし、走ってくるランナーを待ちます。エイドでは南伊豆町で採れた地場産品のポタージュスープ、トマトゼリー、生姜おにぎり、芋ようかんなど、皆で協力して作っております。疲れて走ってきたランナーを笑顔でお迎えし、元気を取り戻して送り出したい一心でエイド活動しております。また、今年

は、静岡DC本番が開催され、観光協会の依頼を受け、スカイランタンin南伊豆での準備、ランタンづくりに参加しました。薄明かりの空にランタンが舞い上がり、やがて暗くなると、お客様と一体になり、その幻想的な光景を見たとき、お手伝いをしてよかったなと思いました。

私自身は、あっそう会のほか、女が論じる会と書いて「女論（めろん）の会」、保育士たちと活動している「おととと劇団」、杉並区と交流がある阿波踊りなどに参加させていただいております。1人ではなかなかできないボランティア活動ですが、メンバーと協力し合い、これまでも微力ですが、町の活性化、地域の皆様に喜んでいただけるよう、頑張りたいと思います。我が町、南伊豆町に、1人でも多くのお客様が訪れていただけるよう、これからも頑張っていきたいと思います。

知事さんに、過去にボランティア活動をしていたとしたらどんなボランティア活動していたか聞きしたいと思います。以上です。

【発言者4】 こんにちは。伊豆下田法律事務所の弁護士の発言者4と申します。こちらに来てから8年ぐらい、弁護士活動をしております。ちょっと今日簡単な資料だけつけさせていただいてるので、見ながら聴いていただけたらなと思いますけれども、ここで弁護士活動していて思う雑感についてちょっと話していきたいなと思います。

お手元の資料にもあるように、こちらの方では高齢化率がすごい高くてですね、独居老人もかなり多いので、やはり高齢者関係の仕事というのは結構あるんです。その時にですね、普通に生活できていればいいんですけども、高齢化がどんどん進んで認知症とかになっていくとですね、世の中生活していると、買い物したりとか家借りたりとかそういうのも全部契約なんですよね。そういう契約が、だんだん認知症になって判断能力が落ちてきてできなくなっちゃうと、そういうときに、代わりに判断をしてくれる人が必要という話になってくるんです。この時に成年後見制度といいまして、裁判所がですね、本人の代わりに、いろんなことを判断したり財産を管理してくれたりする人を選んでくれる制度があるんですけども、今回この点についてのお話を少ししていきたいと思います。認知症とかで、ちょっと判断ができなくなってしまうと、御家族とかちゃんといらっしゃれば、代わりに買い物に行ってくれたりとか、病院に連れていってくれたりするわけなんですけれども、なかなかそういう方がいない独居老人の方が多くて、ここに書いた数字だけで見ると、下田市でも2千人ぐらい独

居老人がいるという形になります。実際にあった話なんですけれども、道端でぱたんと脳梗塞で独居老人の方が倒れてしまったときに、誰がどういうふうに面倒見るのかって話はどうしても出てきてしまうんですね。で、こういった独居老人の方に関する事件というのを、私もこちらに来てすごく受け持つようになったんです。1年目は私ずっと大阪で働いていたんですけれども、結構大きな事務所でして、ほとんど企業系の事件ばかりやっていたんです。ところが、こちらに来てからですね、福祉関係の仕事をするようになって、非常に市役所とか町役場とか、県の職員の方とも一緒に福祉の現場を歩くことが多くなったんですけれども、本当にごみ屋敷になっていたりとかですね、虐待されている方のケースとかいろいろ入っていくと。こういう時にはですね、私みたいな弁護士とかが、本人の代わりにいろいろしてあげる後見人になって動くことがとても多かったです。こっちに来てからおそらく80件とか90件ぐらい後見事件というのはやっているんですけれども、そうすると、私が見ていくその後見人の量がどんどんどんどん増えていったりとかですね、福祉の現場も私のような専門職もマンパワーがどんどん足りなくなっていくと。その時に、私のような人の代わりに後見人をやってくれる市民の方がいらっしゃれば、福祉の現場のマンパワー不足が解消されて、回っていくのではないかという話が出てきたんですね。徐々に、福祉の現場の方で、後見人の担い手不足と市民後見人の育成っていう話が出てきたんですけれども、例えば虐待とかいろんなことに遭って、困難期を脱した方について、一般の市民の方々がですね、後見人をやって、どんどん市町の福祉の担い手を増やしていく活動ができないかということで、3年か4年ぐらい前からですかね、市町の自治体の方や我々専門職や社会福祉協議会とが一体となって、市民後見人をどんどん育てていって、この辺における福祉の担い手のマンパワー不足を解消して、支援を増やしていきこうという活動をしています。これからもどんどん高齢化が進んでいく地域ですし、おそらくもっとマンパワー不足も進んでいくと思うんです。なのでこれからそういう後見人、支える後見人をどんどん増やしていって、まわりの方々に支えられて生活できるようなところになっていったらいいなと思います。

中心的な話はここなんですけれども、あと私がこの辺で弁護士をやっていると思う雑感、ちょっと思ったことについても、良い機会なのでしゃべっていきなさいと思います。法教育の重要性って書いてありますけれども、法知識にちょっと関心を持っていただけだったらいいなと思うことが多いんです。例えばですね、民宿とかやっておじいちゃ

んおばあちゃんって結構いたりしますよね。そういう人たちが結構高額なリース契約を組まされていることが多いんです。どういうことかという、大きな家電量販店で買った5千円とか1万円のコピー機とかファックスとかありますよね。ああいうのを50万円とかでリース組まされてるケースとかも結構あるんですね。それが事業主なので、消費者関係の法律で保護されません。なぜかという、消費者保護法というのは、一般人と業者さんがやりとりすると、一般人の能力が低いので、消費者関係の法律で助けてあげようという話なんですけれども、民宿とかをやっていて自営業者だと、営業者対営業者の関係になるので、消費者関係の法律が全然適用されないというケースがあるんです。そうすると極めて保護がしにくくて、「おばあちゃんが何か50万円のリースを組まされてるんですけど。」と、たまたま家族が発見しても、かなり助けてあげにくい。なので、高額な契約をする時はですね、ちゃんと知識を持って活動していただきたいなという話とかもあります。

また、企業コンプライアンスの問題というのもありまして、結構、雇用契約書がないです。そもそも働きに行ってるけどちゃんと契約書を作ってなかったり、時間の管理も全然されていなくて、残業代が発生してるかどうかすらもわからないという。場合によっては、ちょっと具体的に言うとあれなんですけども、最賃法（最低賃金法）が守られていない業種の分野も結構あって大変ということなんです。そういう問題も結構多いんです。

それと関連して、すいません、弁護士会の宣伝になってしまうんですけども、実は労働審判という手続きが世の中にありましてですね、訴訟とはちょっと違って、原則3回の期日で、労働者と使用者の紛争を解決する制度があるんですけども、実施してる裁判所は静岡では、静岡市と浜松市。沼津や下田ではやっていないんです。なので東部地区の方が、迅速に労使関係の紛争を解決しようと思うと、静岡市まで行かなきゃいけないです。これは結構大きな問題で、今東部地区で労働審判の誘致活動をやっています。おそらく、下田市とか南伊豆町の議会でも誘致の決定をしていただいたと思うんですけども。だからこういうのもどんどん進めていって、法律の知識を持ったり、労働環境の改善ができたならなど、雑感としては思うところです。

最後、土地に関して少し喋っておきます。この辺も特有の問題なんですけれども、不動産の相続手続きが全く行われていない土地がすごく多いです。これは非常に、経済的にも、防災の観点からも悪影響なことが多いので、皆さん相続にちょっと関心を

持っていただけたらなと思います。例えば、この間の台風で、山が崩れて木が倒れたと。山が崩れて木が倒れてその木をどけて欲しいんだけど、登記を調べてみたら、明治生まれの人のまんまで。誰に請求していいかわからんという話が出てきちゃったりします。他方、その長年利用していない別荘地等や空き家問題とかもありまして、こういうのもほっとくと、家が倒れてきたりとか、そういう問題もたくさんある。なので、弁護士として活動していても、大変なことが結構多いなと思いながらやっています。ありがとうございました。

【川勝知事】 どうも、発言者3さん、ボランティアの活動をされておられるということですね。最初8人でやったのが良かったんじゃないですか、末広がりですからね。末が広がってきて、南伊豆を盛り上げるためにですね、仲間が8人から今21人ですか、そのように増えてきたっていうのは御同慶の至りといえますか。同時に多分、その会が明るいでしょ。そしてまた郷土を愛する気持ちが強いということだと思うんですが、桜と菜の花の祭りだとか、ウルトラマラソンだとか、南伊豆はいろんなイベントに事欠かないと思いますけれども、それは行政だけではとてもできないことは言うに及びませんが、町民の方たちが一緒にやらないと。参加した人たちの感想も違ってくると思いますよね。だから、実はボランティアっていうのは、暇だからやってるっていうんじゃないっていうことが良くわかったんじゃないかと思いませんか。ですから、やはり意思を持って、この地域のために、みんなで盛り上げていこうよという、そういう仲間があって初めて力が発揮できるということを学んだ感じがします。

「川勝おまえボランティア活動やったことないのか。」そうですね、思い出すとあんまりないですね。恥ずかしいですけど。ずっと教員の仕事をきて、一生懸命やってきましたけども、青少年の教育ということですが。一度イギリスに行きました時に、いわゆる老人ホームが向こうにもございまして、あまり言葉を話す必要がないから手伝ってくれと言われて、はいわかりましたと。大体頼まれたことは、Noって言うことはほとんどないんですけども、行ったらそこは、戦争の経験のある方たちだった。前のね。1970年代のことです。ですから、まだ日本軍と戦った人たちだったんです。そして、お前は日本人かと言われて、それで俺は日本人とは云々かんぬんってやられてですね、あの時は参りましたね。だけどその時に、なるほど、そういう時にも

どう対処するかということも含めて、人を助けるというのは中々のことではないというのは痛感したのを覚えております。そんなぐらいでしょうか。

もともと相互扶助というのがあったんじゃないかと思うんですよ、日本には。ボランティアってのは英語じゃないですか、自発的にいろんなことを援助すると。いつ出てきたかっていうと、1995年1月の阪神淡路大震災の時ですね。その前後にロサンゼルスで震災があったり、海外でありました。その時には日本の神戸ですから、たくさん外国人もいるし、外国の人も助けに来たと。その時にですね、略奪が行われなかったとか、皆お互いに我慢して、被災してる人たちも、被災しているにもかかわらず、いろんなものに対して順番で並んで、助けていただくとかですね、これやっててですね、この国は本当にボランティアの、ボランティア活動の最先進国だということで、日本人はボランティアを皆してるっていうふうに言ったわけです。だけどこれ、その時に始まったことじゃないと思いますよ。だから、発言者3さんのような人たちが、この国にはちゃんといるんじゃないでしょうか。だから、誘われたら、そんなのがあるの、じゃあ私もやってみるといふ人がいると思いますね。私の場合、そういうふうな機会にあまり恵まれなかったんですけども、気持ちの上では全く同じですよ。そういう地域社会をこの列島の中で作ってきたんじゃないかと思います。南伊豆とか賀茂地域は、古い歴史もありますから、そうした中で培われてきた、その共同体の意識が強いんじゃないかと思いますね。それが今、モデルのように息づいているのが、発言者3さんの会じゃないかと。例えば女性が論じる会を女論（めろん）の会って言うんですね、それだけで楽しくなりますよね。ですから、そこに既に、何となく楽しんでやっていると表れてますよね。それからもう一つ、美味しいものを食べる会から始まったというのがいいんじゃないですか。まず美味しいものがあるってことです、ここにね。季節のものが、いろいろ違うものが出てくるってことですね、今度はそれをいただきましょうというふうなところから、どこかに無理してることなく、だけど、一緒にやろうじゃないかという、そういう良い地域社会を垣間見たと言いますか、お聞かせていただいた感じがしました。

それから発言者4さんはね、こういう人がいて良かったと思います。大体ここは問題がなくやってきてるので、問題がある時に大変ですよということに、こういう人でないと気がつかないんじゃないでしょうか。今これからいろいろなあくどいような、商法とか商品とか、またあるいは災害があった時に、いざという時どうするかという

ことに、やっぱり法律の知識を持ってないと駄目だということは、ちょっと今の5、6分のお話でも、「おっ」という気づきがあったような気がしますね。ちょうどこういう人が来て良かったと思います。今はその福祉のことをなさっておられる。後見人の問題で、もう手がとてもじゃないけれど一人でやってられないということで、育てなくちゃいけないということで、教育現場に、こういう若いお兄さんみたいな人ですから、優しく語ることもできる力も持ってらっしゃるので、下田なり南伊豆で、賀茂地域全体です、法律と福祉っていいですか、それから最低限持ってなくてはいけない、法律知識というようなことで、数ヶ月ごとでもいいからテーマを設定して法律について、小学校中学校その辺りからですね、それこそボランティア活動で、先生方もお忙しいでしょうから小学校順番に1ヶ月に1回ぐらいですね、子どもたちが今度はお父さんお母さんおじいちゃんおばあちゃんに聞いたことをお伝えできるような、そういう循環ができると良いかもしれませんね。子どもは先ほどのダックのように、さっと覚えますからね。ですから、子どもの時分、小学校の高学年あるいは中学生ぐらいの時にですね、基本的な知識をしっかりと入れておいて、これおじいちゃんおばあちゃんとお父さんお母さんに伝えてくださいと言っていただくと、将来後見人も、地域の中で育ってくるという可能性が高いですね。特に独居老人が元気になることがとっても大事ですけども、いざという時のために備えておくべき法律的な知識を、今日の話きっかけに、この地域全体で持っていただければというふうに思った次第であります。以上であります。

【発言者5】 皆さん、こんにちは。私は南伊豆コーディネート代表、ゲストハウスDajaのオーナーの発言者5と申します。よろしく申し上げます。

私はですね、2014年の4月から南伊豆町の地域おこし協力隊として、町内で最も過疎化の激しい漁村地区の活性化に3年間携わってきました。任期終了後は、その任期中にできた人脈を活かしながら、南伊豆の良さを多くの人に知ってもらい、人と人、地域と資源をつなぐための地域コーディネートとして起業しました。また、隊員の任期中から、空き家や空き民宿を活用したいという思いがあり、そこで、人と人が交流できて繋がれる拠点としての宿泊施設を開業したいという思いがありました。多くの方に御協力いただきながら、昨年7月ですね、思い切って空き民宿を購入しまして、ゲストハウスDajaという宿を開業することができました。現在私は、このコーディネ

一ト業と宿業を二本の柱で活動しているんですが、この宿はですね、私が釣りが好きで移住してきたんですが、一人でも多くの方に、この釣りを通して魚に接してもらう機会を増やして、魚に興味を持ってもらうこと、そうすることで、漁業の発展に少しでも繋がれば、過疎化の激しい漁村地区が元気になるのではという思いからスタートしました。現在ですね、今年まだ開業して1年なんですが、7、8、9、この3ヶ月で、宿に泊まって、釣りをして、釣り人以外です、実際に普段釣りをする人以外で、釣りをして、そして自分の釣った魚を食べた大人の方、お子さんの方、延べ70人近くの方が、この宿で初めて釣りをした、食べたという方がいらっしゃいます。決して多くないかもしれないんですが、そういうふうには魚に接する機会というのを増やしていくことで、私の友人の子どもはスーパーに行くとお肉、お肉と言っていたのが、ちょっと魚をさばきたいと言うようになったというぐらいまで、小さな変化かもしれませんが、そういうようなことがあったという、とても嬉しい話をいただいています。なので、こういった形で少しでも魚とか良さを知ってもらえれば良いのではということで、自身をですね、漁村再生釣りガールと、まあガールという年ではないんですが、称して、また男性だけではなくて女性の釣り客を増やしたいという思いで、釣りガール倍増計画という計画を打ち立てて活動しています。

こういった釣りガール倍増計画という自分のコンセプトを打ち立てられたのも、2017年にですね、日本最大級のビジネスコンテスト、これに応募するきっかけがありました。そこでファイナリストに選んでいただきまして、約2千人の前で、自分の夢を発表する場をいただいた際にですね、自分の強みを活かしてコンセプトを決めていこうという、ただのビジネスコンテストではなくて、いろんなことをブラッシュアップしていただいたからこそ、今このゲストハウスのコンセプトというのが定まって動いています。こういったビジネスコンテストに出るチャンスとか、例えば今日のこの場に立たせていただいているチャンスというのも、私が南伊豆町の地域おこし協力隊だったからこそです。決して、私に特別な何か知識や経験があるわけではなくて、そういう場に出る機会を与えていただいたからこそ、私は今南伊豆に残って事業をすることができています。今度は、私自身が、皆さんにいただいた、そういった御協力を返すためにも、起業したい、地域で頑張りたいという人たちを応援できる、この夢アワードビジネスコンテストを南伊豆版で行いたいという思いを、町長に相談しました。で、どうやったら南伊豆町でできるかというところを、町長始め、役場の担当者の方

や、商工会、そういった方と話し合いをさせていただいて、今年の1月に「みんなの夢アワードin南伊豆」というのも開催することができて、ここでは、起業したい方だけではなくて、高校生や中学生、小学生も夢を語ることができました。私は今、「美しい“ふじのくに” まち・ひと・しごと創生県民会議」にも出させていただいてるんですが、今度は伊豆全体でやってみたい、伊豆を盛り上げていきませんかということを発表したら、ありがたいことに今度ですね、伊豆チャレンジャーアワードということで、伊豆全体のビジネスコンテストを行うことが決定しました。これも、私がそういう場でこういうことをしたいというきっかけをいただいて、ただ私は「やりたい」と夢を語っただけなんですけど、それをどうにか形にしようということで周りが動いてくださいました。なので、知事、いろんなチャレンジをしたいという方がたくさんいらっしゃるんですが、そういった方々がもっと表舞台に出て、発表し、いろんな方と繋がることで、夢とか、可能性っていうのが広がっていくと思うんですね。なので、ほんとそういったところを、行政の力を借りてですね、民間と一緒に、やはり移住を外から呼び込むだけではなくて、伊豆に残って仕事ができる、働いていける、そういう場を作るためにも、皆さんに多くのきっかけ、チャンスというのがあればいいなと思います。

なので、そういったものを作っていけないかなということと、あともう一つですね、私今、宿をやっている中で、実は、外国人のお客様がとても増えてきてます。この年であれなんですけど、英語が全く話せない女将なんですけど、逆転の発想でですね、今英語表記、英語で喋りましょうって言ってますが、静岡県に来た外国人のお客様は、日本を味わってもらうために、日本語ガイドマップみたいな、静岡県版を、2020に合わせて作っていただければ、静岡県に来れば、日本語が喋れるようになるじゃないですけど、そのほうが、今、英語で対応しようとして、高齢化率も高い中で、それよりも、外国人の方に、せっかく日本に来たので日本語話しませんかというような、なんかそういう形での逆バージョンのインバウンド対策もしていただければなと思います。よろしくお願いします。

【発言者6】 皆さんこんにちは。食品加工の会社、クックランドという会社を営んでいる発言者6と申します。ほかにはNPO団体ですとか商工会議所、あるいは法人会、ライオンズクラブなどの役員も務めさせていただいております。私は第二次産

業という立場の方から、分業制について発言させていただきたいと思っております。

そもそも我々の生活というものは、分業制で成り立っていると思っております。魚を例えば食べるのも、第一次産業の漁師さんが魚を釣って、第二次産業の加工業者が料理をして、そして第三次産業の販売者が売ると、こういう仕組みになっておるわけですが、現代人が例えば自給自足をするとしたら、本当に大変なことなんだと改めて思っております。しかし、この伊豆地域の各産業は今弱体化をしております。分業制ができていないのが現状ではないかというふうに私は思っています。より細分化した連携を再構築することが、急務だろうというふうに考えています。例えば第三次産業の宿泊施設を考えてみますと、大きく接客とか、調理とか、掃除・清掃、大体三部門に旅館は分れると思うんですけど、第二次産業で調理を担当すれば、旅館の負担が大きく軽減されるだけでなく、第二次産業のマーケットが広がると、まさにwin-winの構造が生み出せるというふうにも考えています。そして（伊豆の）民宿発祥の地とも言われているこの地の民宿が高齢化で衰退をしてしまったという原因の一つにも、例えば調理ですとか、清掃、こういったものを分業化していけば、あとは民宿のおじさんおばさんが接客だけをできるという形になって、若干、このような状況にはならなかったんじゃないかなということも反省をしております。

私は常々、商いというものに関しては、困っているところから生まれるマーケットではないかなというふうに思っております。困っているところに、商売のマーケットが必ず生まれてくる、こういうふうに私は考えて、いつも経営をさせていただいております。各産業の得意分野をですね、活かした産業構造の組み換えと申しますか、そういったものを、行政の方でお力をいただけたらなというふうにも考えています。このような考え方のもとですね、弊社は、ファーストペンギンとなり、様々なチャレンジをしてきましたが、また多くの失敗もたくさんして参りました。皆さんが真似したくなるリターンを見せて来られなかったということに関しては、努力不足であるし、経営陣としても痛感をしているところであります。

またあるいは社会貢献の活動なんかはですね、スポンサーがつかなかった150名程度の高齢者のグランドゴルフ大会などを支援をさせていただいて、皆様の御好意で、弊社の自慢の商品であるキンメコロッケ杯と名前をつけていただいたりしております。年に2回開催をしております。高齢者が活動すると、その周辺が清掃されて綺麗になるんですね。そして、その地域の治安にも大きく寄与しているという結果が出てます。

従って、高齢者が元気に活動している地域というのは、住んでよし訪れてよしの環境になるのではないかなと思ってますので、どんどん高齢者の方は表へ出て元気よく活動してもらいたいなというふうに思ってます。ですから、この支援というのは単なる奉仕ではなくて、地域の人が、地域が元気になる、お礼と感謝の気持ちからの協賛という形で、いつも挨拶の中に入れてさせていただいて、こういう協賛をさせていただいております。それと、そういうこういった支援活動をですね、真似していただくような企業がたくさん出てくるように、我々ももっともっと頑張っていかなきゃならないのかなと思っています。

そして、弊社の商品であるキンメコロッケの開発は、地域の名物を生み出すとともに、伊豆の観光PR大使として、そういうふうになってもらいたいという願いから、この商品を生み出しました。一般的に、一泊の観光客の方は旅館で夕食、朝食、そして翌日、地域で昼食の約3食が主流です。しかしキンメコロッケはこの3食のマーケットで争わず、別腹のおやつマーケットという形で、安価にキンメダイを味わってもらい、地域の消費でも共存共栄を図っていきたい、3食プラス4食目で地域を盛り上げていきたいというふうに考えております。

あと、少し話は変わりますが、先日東京に行ったときに、有楽町の静岡県東京観光案内所に足を運んだときに、ちょっとわからなかったものですから、インフォメーションに聞いたところ、こんな答えが返ってきました。「静岡のブースはお茶とうなぎパイしかないよ」と。ちょっと衝撃的な案内を受けたことが、私が静岡県人だと多分知らなかったんでしょう、ちょっと残念な思いをしたんですが、「近くにある北海道物産展ですとかそういうものを見るとねえ。」と言われることもちょっと残念で、少しカチカチしながらブースに行った思い出があります。そして、そういう案内所というか、静岡に興味のある人はそういう案内所に行くと思うんですね。でも、もっとその物産色を強くすれば、こういった地域の名物から静岡に興味を持ってくれる、そういった環境を逆算して、モノからお客さんが静岡に興味を持ってくれるような環境も作っていったらなというふうに思ってます。そういうことを考えますとやはり、静岡県富国徳を理想郷とするふじのくにには数え切れないほどの産物があるということは、皆さんも御承知のことだと思います。そして、特に伊豆南地域では、有徳に繋がる元気なファーストペンギンになる青年もたくさんおります。この地域が、あるいは下田だけじゃなく南伊豆も東伊豆も西伊豆も、全て一丸となって挑戦するチャンス

を与えていただきたいというふうに思ってます。

そしてまた、インターネットのプラットフォームを構築できずに、多くの産品が今、眠っている状態であります。どうか、インターネットに踏み出せない商品にも光を当てていただくような施策をお願いしたいなというふうに思ってます。我々は決して、地域に密着するだけではなくてですね、広く他地域を研究分析し、我々の武器が通用するフィールドというものの考察をいつもしております。その中で例えるならば、例えばアジを釣るのにブリの仕掛けではアジは釣れません。そしてブリの漁場でアジの仕掛けを垂らしても、ブリは釣れないんです。しかし、有楽町の案内所とインターネットのプラットフォームは、釣りたい魚と仕掛けが合った、伊豆の強みが出せるフィールドではないかなというふうに、私は確信しております。どうか、川勝知事におかれましては、司会の地域局長に、このうるさい男の話をじっくり後で聞いてあげなさいという御指示をいただきまして、こういうことをお願い申し上げまして、本当に5分間の簡単なスピーチであります。私の発言とさせていただきます。ありがとうございました。

【川勝知事】 どうも、二人ともすばらしいお話で、発言者5さん、釣りが好きだっということで、地域おこし協力隊で来られて、こちらにしっかりと馴染まれたということで、南伊豆っていうのがいいんでしょうね。さっきの発言者3さんも南伊豆でしょ。そうですね。だから女性にとって居やすいところなのかしらね。それは男性が良いからでしょう。違いありませんね。あとは、一番最後に言われたことが一番面白かったですよ。大体今、日本にですね、留学生が年5千人ぐらいの割合、5千人ずつ増えてきてるんですよ。30万人を今超してます。中曽根康弘っていう人が首相だった時に、10万人も来てくれたらいいって言ってたのがですね、気がついたら、もう、日本から海外に行くよりも向こうの人たちが来るのが、大体今から20年ぐらい前に増えて、そしてどんどん増えてるわけですね。なんで来られるかっていうと、日本に憧れているからです。日本に憧れるってことは、日本人と会話をしたり、あるいは日本の生活を味わいたいということで、一番の基礎は言葉ですからね。ですから、発言者5さんが言われるように、日本語が共通語、あるいは伊豆弁が、静岡弁ですよ、「だもんで」っていうのもですね、だもんで弁をふじのくにの共通語にすると。英語ではないと、静岡弁だと、伊豆弁だと、これを共通語にすると。今英語を喋る人もたくさ

んいるから、その人に通訳してもらったらいじゃないですか。基本的に全部綺麗な伊豆弁で、あるいは静岡弁で、あるいは日本語で、相手に喋ると、皆それぞれアクセントがありますから。綺麗な、例えばイギリスに行ったら、綺麗な英語を彼らがしゃべります。聞いてて気持ちがいいですよ、こういうふうに喋ればいいなっていうふうに。同じようにですね、綺麗な正しい日本語で外国人の方に応接するというふうにして、日本語を国際語にするという、こうやっていきましょう。アメリカ人は、アメリカはですね、海外の人たち、ここにイスラムは入れないとか有色人種は入れないとかですね、それくらい排他的になってきてるんじゃないですか。我々ふじのくににとまったく逆ですよ。特に伊豆半島はそうでしょう。観光で成り立ってるわけですから、どんな人たちも来てくださいということですね、そして、ここでは日本語が共通語になっているという、日本語を丁寧に教えてくれるというか、不自由しないような仕掛けができています。

これはどうしたら良いのかちょっとわかりませんが、発言者5さん、例えばみんなの夢アワードとかですね、みんなの夢アワードin南伊豆だとか、伊豆チャレンジアワードなんかの申込みを書かれるときに、これプリント作るじゃないですか。パソコンっていうか昔はワードプロセッサ、あれ昔のタイプライターと同じようになってるんですね。だから、伊豆だと、izuじゃないですか。izuとこう押せば、キーを押せば、画面にはひらがなで「いず」と出てきたり変換すれば漢字になったりするわけでしょう。だから、実際はローマ字を書いているんですけども、画面上は、プリントアウトした時には、ひらがなとか漢字になって出てくると。だから日本人の、おそらく8、9割はローマ字入力されてると。少なくとも県庁はそうですね。これ、誰も命令した訳ではないんですよ。例えば「わ」というの書くのに「wa」でしょう、二つ押さんといかん。かな入力は「わ」だけ押せばいいんですから。だからそれ、両方どちら選んでもいいんですけども、要するにですね、漢字は中国でしょ、これは輸入した文字ですよ。それも使ってるし、韓国は申し訳ないけど、ハングルを強制的に使うような政策を取られた結果ですね、今の若い人が昔の漢字読めないじゃないですか。我々は漢字も使うと。ひらがなカタカナもあってかつ、ローマ字も使ってますから。ですから、世界が作り上げた文字、ローマ字ってのは21ですよ。それと意味のある文字、漢字両方使ってるわけですよ。だから、国際性があると思いますよ。だからワープロでもですね、ローマ字のまま見せれば、発音はできるわけです。ローマ字は皆読め

るから。そういうふうには書けばですね、わかるっていう方法も一つあるかなと思いましたがね。いずれにしてもこれ大変大胆な、しかしですね、すばらしい発想だと思いましたがね。それは自信を持ってないといけないと、自信をくれたのは南伊豆だとおっしゃってるわけでしょう。これはすごいですよ。やっぱり太平洋のね、海の神、ワダツミの、やっぱり力じゃないかという気がしますな。

それから発言者6さんは理論的ですね。ただ言ってることは正しいんじゃないでしょうか。旅館ですね、3日も泊まると。そうすると調理する人は夕食出すの困るんじゃないでしょうかね。1週間泊まると、初めての人はそれなりに良いけども、同じ料理出すわけにいかないというふうなプレッシャーがあるんじゃないでしょうかね。だから、調理は調理で、また夕食食べるときや昼ご飯食べるとき、それは外で食べればいいんじゃないかと、分業したらどうかと。町の食堂と、それから寝泊まりするところと、そういうのを上手にネットワークに、分業というのはネットワークですから。ある人はこちら、ある人は別の所で、それで全体として一つのものになっているということですから。そういうふうにして、町全体がそれぞれ一番得意なところでやっていって、旅館がもう、調理から接客から何から全部やるとなったら大変だから、それを分けて、南伊豆なら南伊豆、下田なら下田ですね、そういうネットワークを組んだらどうかという。そしてお客さんは、今日あそこで食べる、こちらは明日食べると。頼めば旅館でも食べられるというふうにするればですね、そうされてると思いますけども、それはもう自覚的にやっていくと、発言者6さんの言う分業になるんじゃないかと思えますね。これはあまり大きなところではできませんけども、こういう所だったらできるんじゃないかという気がしました。

それから、お茶とうなぎパイはですね、本県の売りですが、これしかないというのはおかしいですね。そんなことですね、後でゆっくりと1時間、2時間とかですね、地域局長に、発言者6さんの話を聞くように。もう納得いくまで聞いてください。そういうことにしましたので、どうぞよろしく。それから静岡県にはですね、農産物だけで339あります。それから海産物入れると400以上ありまして、ですから食材の数は日本一です。2位が218ですから、うちは今のところ439あります。日本一なんですよ。ですからこの食材をどのように組み合わせるかということですね、食品の加工もですね、これはものすごい額で、農産物とあれて3千億ぐらいいっているんじゃないかと思えますけれども、それぐらいの食品には自信のある県なんですね。それを有

楽町のサービスのところでですね、利用してないというのはけしからんと。わかりました。首都圏の人は、大半の人は伊豆に行くんじゃないでしょうか。大体伊豆に来るお客さんは西よりも東の方が多んじゃないですか。7、8割、特に熱海、伊東、それから東伊豆から河津を経てこちらの方、南伊豆までは大体この、こちらに杉並区の施設もあるぐらいですから、首都圏と一体ですよ。ですから首都圏にですね、南伊豆含めた伊豆についてももっとも重点的に、有楽町のこの静岡紹介センターのところでですね、やるというのは意味があることだというふうに思います。ですから、それは特別補佐官にも言っておきます。特別補佐官はしょっちゅう東京に行ってますので、有楽町のこの、あそこは40数県ぐらいが全部出てですね、実はそこは大変大きな活躍をしまして、ここ2、3年ですね、終の住処は静岡県というイメージが強かったんですけど、20代から40前後ぐらいはどのぐらい占めてますかね。8割9割ですよ。ものすごい。だからね、戻りつつあるんです。あんまりまだ社会的にまで表面化してませんが、数字の上ではですね。ですから、そういう役割もしてるんですけども、一番来やすいところは、浜松まで行くよりは、伊豆であるとか東部であるとかですね、そういう首都圏に近いところじゃないかと。眺めもいいですから。そういう意味も込めまして、食材、それからこういうお花もですね、704品目あります。マーガレットであるとかは、100品種まではいってませんが、大体ですね、数百品種作ってますよ、1品目について。ですから、実は花の都でもあるんですね。お花であるとか、果物であるとか、それから農作物であるとか海産物は言うまでもありませんけど、それからこのキンメコロッケはここの特産品ということで。特に発言者6さんですね。だからすごいです。今日は食べられないんじゃないかと思うくらい豪華な弁当が出ましてですね。それはもう足りないんじゃないかと思う、食べ終わったらですね。それくらい美味しいクックランドのお弁当をいただいたわけですが、そこにもちゃんとキンメコロッケが入ってまして、九つぐらい違うものが入ってたわけ。一つ一つ、九つのマスに1マスに、キンメコロッケはキンメコロッケ一つでしたけど、多いのが五つぐらい入ってましたね。だから食材の数としては優に30品目入ってたんじゃないでしょうか。大体32品目を食べてると身体に良いつてわけですよ。だからクックランドの弁当を食べるとですね、身体に良いつてことじゃないですか。そんなわけですね、食がすごく大事だと。

それから、この二人に共通してるのはですね、先ほどの発言者3さんもそうですね

ど、やっぱり人が幸せになるのは何かっていうと、人を幸せにすることではないかと思えますね。ですから、人のために多分に生きるっていうことほど尊い仕事はないと思えますけども、実は人のため世の中のためになると自分も幸せになるんじゃないかというふうに思えますね。そういう文化を、今日は何か聞いている感じがします。わざわざボランティアって言わなくたってですね、ボランティアって言葉で言われてますけれども、わざわざそういう言葉としてやることも必要ないような地域性がここにあるんじゃないかというのを二人の話を聞きながら、今思った次第であります。ありがとうございました。

【発言者2】 すみません、ちょっと先ほど洋上のことでムキになっちゃって、自分のことちょっと話し忘れたもので。

昔10年ちょっとぐらい前に、磯の、潜りさんとかイセエビがメインのところ、やっぱり磯焼けって言って、根にカジメがついてるのがなくなってしまいうんですよ。黒潮の関係やブダイとかそういう魚が食べてしまって、そういうことによってサザエ、トコブシ、アワビとかが磯につきにくくなるっていうのを調べて、いろいろ発表させてもらったりもしたんですけど、ここ最近、そのカジメが復活してきて、やっとサザエとアワビ、磯の貝類がまた磯につくようになったので、そういうのもやっぱり、何十年、数年かけて、このところのカジメも復活してこの先また貝類も豊富になってくるんじゃないかなっていうところを、昔から調べた結果そんなになりました。

あと自分の本業はキンメ漁なんですけど、主にこの地キンメ、下田でいう地キンメって言いまして、地キンメっていうと、この地域でしか採れない、本当に日本一って言えるぐらいの脂の乗ったキンメ、やっぱり下田は有名なんですけど、昔採れたんですけど、このところ漁獲量が減ってきました、なんで減ったかっていうのもわからないんですけど、10年15年前、20年前に比べましても、本当に今微々たるものなんですよね。何十匹って採れたものが1日行って本当に数匹とかがってなっていましたし、さっきの話っていうわけじゃないですけど、伊豆の海自体は自然も海も綺麗ですし、自分でもこれだけ綺麗な海で、食べ物も、海のもの、魚、貝類にしてもやっぱりおいしいものだと思うんですよね。皆さんに、都会の人たちにも自慢できるものがたくさんあると思うので、どうにか貝類も魚類も保護した方がっていうか、資源保護しながら、どんどん広めていきたいと思えますし、キンメ漁に関しても、漁獲量が少な

くなった分、自分たちで自粛して、週に1日休もうかとか、漁獲日を減らして、今ちょっとキンメを増やそうじゃないかとか、頑張ってる努力してる所なんですけど、それがまた何年後かキンメが増えてくれればいいんですけど。そういった面ですっきりとムキになって洋上のことを言っちゃったんですけど、自分で始めてから、もうかれこれ20年ぐらい、20年ちょっとになりますかね。魚はカクンと落ちちゃってるんで、どの魚に関してもですけど、キンメだけじゃないんですけど、貝類、イセエビ、魚は全体的にやっぱり少なくなってると思うんですよ。そういった部分でも、どうにかしてどうにかして復活しようかなと思って。周りの漁師さん達も、日数減らしたりそれなりにいろいろ考えて活動してると思うんでね。僕ら、それとの戦いなんですけどね、何とか同じ南伊豆の人も東伊豆の人も下田の人もそうなんですけど、多分自分たちのね、目の前の磯とか海を多分大事にしていってると思うんでね。これからの僕らの課題、それをどうするかっていうのが課題となっていくと思うんですけどね。そんな感じに今努力してます。

【川勝知事】 おっしゃるとおりですね、世界的にも漁獲、魚の採り過ぎっていうものがあるって、一方でまた鯨だとか、大型の哺乳類の、何て言いますかね、イルカも含めてですけども、そうしたものを保護する動きが結果的にですね、小さなお魚が増えない理由にもなっているとも言われておりました。ですから日本のように、世界で最もたくさん違う種類の魚を食材にしてきた国はありませんし、日本ほどたくさんの、日本の海の近辺にですね、たくさんのそういう種類の魚がいるということで、ここは魚の王国なわけですね。そこが今危機に瀕してるということで、今、発言者2さんがおっしゃったように、資源のことについて、漁師さんがお考えで、今一番話題になってるのは桜エビですけども、先ごろの春漁だとかはもう一切採らないとかですね、そういう無理してまで、資源はちゃんと守らないと将来の世代に申し訳ないということですね、採るということと資源の保全ということの両立を図らなくちゃいけないと。我々は今、全部で四つの水産技術研究所、焼津に一番中心ありまして、あと三つブランチがあるわけなんですけど、こちらにも伊豆のブランチが下田にございますが、そこでキンメも、何て言いますかね、種苗を作って、そしてそれを放流するという。まだ成功してるとは言わないんですけども、そういうやり方も含めて、養殖じみた形の漁業もですね、これから主流になってくるかなと。それから海が、こちらは違うでしょう

けれども、いわゆるマイクロプラスチックっていうのですね、汚されてきて、それを小さな魚が食べる、それをまた大きな魚が食べると。それを人間が食べるということで、海の魚よりも陸上養殖にならないと安全でないというぐらいまでですね、危機感を募らされているところがあります。

ですから、もう海が汚れつつありますし、それから海の生態系について理解のない人たちが乱獲をしているっていう面もありますので、日本はそういう漁業の最先進国として、他の人たちに勉強ができるような漁業の先生として、発言者2さんなどには、海外から来られる、ミクロネシアとかですね、そういうところからは、憧れの目を持って見られているのが日本の漁業です。ですから、そうした自覚も持っていただいて、資源の保護と、そして同時にまた生活としての、産業としての漁業とどう両立させるかということですね、そうした問題意識は共有しておりますので、決して発言者2さんだけのものではないということでもあります。

【川勝知事】 さっきね、発言者6さんがおっしゃった、民宿ですか、民宿は下田から始まったんですか。それはいい話ですな。人を泊めると、食べる場所は別にする。昨日吉田松陰が泊まったというお家に行ったんですけども、そういうものが自然に民宿になるんですね。彼は七日間ぐらいそこに泊まられてですね、最高の思い出だったみたいですね、聞くところによると。蓮台寺のあそこの御婦人たちがですね、それ守っておられまして感動しました。素晴らしいですよ。そういうようなものも、これから法律を上手に改正していただいて、いろいろな民家が活用できるようにできればいいですね。今そうしたもののやり方を、発言者5さんなんかやっちゃってらっしゃるんじゃないかしらね。釣りガールとおっしゃってましたけど、それをもっと増やしていきましょう。

【傍聴者1】 南伊豆の弓ヶ浜から参りました、傍聴者1と申します。中国が今、伊豆半島をターゲットにしていることを、ご存知でしょうか。ジオパークになって、有名になった。中国人が来てくださる、お客様として来てくださるのありがたいですが、しかし、目的は、土地の取得です。逢ヶ浜（おうのはま）の一等地が、最近買われました。私たちは手が出ませんでした。なぜかっていうと、35メートルの津波が来るといふ、そういうジオパークの頭の方が先で、目の前のオーシャンビューの一等地、

もしハワイであれば1億円以上するものが、^{ゼロ}0が一つ違う。そんなのが、たくさん今買われております。伊豆半島はまもなく、china peninsulaになります。何か阻止することができないか、止めることができないか。ぜひこの機会に、知事さんのご意見をお伺いします。

【川勝知事】 いやあ、びっくりしました。今初めて聞きました。知らなかったんでびっくりしてます。ただ中国人が、水源のある山々をですね、北海道始め、買占めてるってことについてですね、これは日本でも国会でもですね、議論されておりますが、伊豆半島で、それが無いはずが無いわけで、今、そのことをお聞きしまして、我々はメガソーラーであるとか、ジオパークであるとか、そうしたところに目を奪われてましたけれども、ちょっとそういうことがあってはならないのですよね、すぐに調査をしまして、後で、その結果も含めてですね、御連絡差し上げたいと存じます。ありがとうございました。

【傍聴者2】 こんにちは。下田市に住んでいます、傍聴者2と申します。今、静岡県の水を守ってくださったり努力している川勝知事だからこそ、お伝えしたいことがあって、こちらに参りました。私は8月27日の伊豆新聞で、洋上風力の話を知りまして、とても驚きました。都庁より大きい大きさのものが100基建つなんて信じられないと思った私は、環境配慮書とかを見たり、企業の担当者の方に直接連絡を取って、みんなで話す会を設けたりもして、いろいろ自分なりに調べたんですけど、やはり企業の方としては、50万kwどうしても作りたいから、これぐらいの大きさのものを100基建るんだっていう、何かこの地域のことを考えてるのじゃなくって、やっぱり自分の企業の利益とか、株主さんの利益を優先したものだというのがすごくわかって、こんなもの建っていいんだろうかと、すごく嫌だっていう気持ちがそこで沸き起こりました。

で、そういうふうを考えてたんですけど、やはりこの世界では、気候変動の危機っていうのがすごく大きく取り上げられてまして、やっぱりこれからは再生自然エネルギーとかがすごく大切になってくる。そういうところの板ばさみで、どうしたらいいんだろうってすごい自分なりに悩んでいたんですけど、一つのあり方として、地産地消エネルギーっていうのがすごく重要になってくるなと思いました。今日、受付でい

いただいたこのパンフレットの中でも、地産地消エネルギーっていうのは書いてありますし、この地域は、例えば南伊豆町だったら、木質バイオマスとか、急な川が多いので、小規模な水利を利用した発電とかも十分できますし、その他の町中とか、下田の町中だったら太陽光発電とかも、いくつかのお家の上につければ、そういう形でも発電ができると思います。静岡市では、最近新聞かなんかで見たんですけど、各家庭で余った電気を小中学校に配るっていう取組もあったので、そういうふうになっちゃい電力を地元の人にまわすっていうのはすごく大切なキーワードになってくるんじゃないかなと思ってます。この地域は、地震もそうですし、台風も巨大化してますので、やっぱり、電気がないと、すごく困ったことになるというのも、先の台風で皆経験してます。そのときでも、そういうふうに地産地消エネルギーがあることによって、少しの期間ですぐ復旧したりとか防災にもすごい役立つんだなっていうふうに考えてます。なので、もし県の方で、この伊豆っていうのを、ジオパークにも認定された自然と人と文化をすごく大切に、エネルギーを大切に使う地域なんだよっていうふうに指定していただければ、洋上風力とか河津逆川のメガソーラーとか、そういう伊豆の自然を食物にするじゃないんですけど、そういうふうにする企業がやって来なくなるんじゃないかなってこう素人なりに考えました。

私は6歳の娘がいるんですけども、やはり自分の子供に、こういう自然をバトンタッチしていきたいとともに、世界をこういうような状態でバトンタッチをしてはいけないっていう思いがありますので、ぜひ地産地消エネルギーと、あと、伊豆半島はこれで推していくんだから、企業が、そういうところにあんまり入って来ないでくれているのをやってもらえないかなと思って、お願いしたいと思います。よろしくお願いします。

【川勝知事】 はい。傍聴者2さん言われるとおりでと思いますよ。日本のエネルギー政策もですね、御案内のように、東日本大震災で福島第一原発の事故を起こすまでは、原子力発電所が安全で安いということですね、そちらの方向にシフトしてたんですけども、結果的には実はものすごく高くつくもので、安全でもないということがわかってですね、一極集中型から多極分散型、傍聴者2さんの言葉ですと地産地消型に変えようということですね。その時に自然再生エネルギーというのが一番良いということで、日本は、伊豆もそうですけれども、日の本の国ですからね。ですから、

太陽光発電っていうのは素晴らしいということで、一気にぐっとそちらに舵を切って、それがもたらすマイナスの影響、例えば太陽光発電のパネルですけど、あそこ鉛が入ってるということですね、作るのはいいけど、これが廃棄処分になったときにどうするんですかとか、誰も考えないで、ただただ設置をします。設置をしやすいように、経済産業省の方もですね、FIT法というのを作って、なるべく設置しやすいようにしたわけですね。今私たちはそのツケを払ってるわけです。伊東であり、河津でそういうことが起こりつつあるということで、これはもう一度、自然のエネルギーをどのように地産地消でやっていくかということで、各家庭の屋根だとか、おっしゃったような小水力発電とかですね、小さなところで多極分散型、小さい物で自分たちのエネルギーは自分たちで賄えるような、効率的な、余ったエネルギーを別のところに売却するなり譲るなりですね、そういうスマートなやり方をやっていこうという動きが今、起こってますので。それは傍聴者2さんが言われた問題意識が共有されてるからです。今、重要なこと言われました。伊豆半島が食べ物にされてると。これは伊豆半島が世界的に認知されてからなんですね。だから、世界の利益を求める集団達がですね、鵜の目鷹の目でここを狙ってるという、そういう状況になりつつあると。だから守らないといけませんね。伊豆半島全体は、世界で最も美しい半島だと私は存じますけれども、この半島をですね、食べ物にさせないと。そのためにこちらは伊豆全体で13市町がありますけれども、伊豆は一つとして、何と言いますか、県と市町が一体となっておりますね、食べ物にさせないためにどういうことができるのかと。特区にでもしていただければですね、国がですよ。我々の方で決めることができるかもしれませんが、今、国の一律の法律でやっていますから、Noと言えない面があって、先ほどの洋上の風力発電もそうなんですけども、環境影響評価の意見しかできないんですよ。ですから、法律が遅れてるんですね。で、取り返しがつかないようになる前にですね、止めないといけないということでもあります。ですから、6歳のお子様にですね、安心して、この地域すごいよと言えるような地域にしなければいけないと思いますので、力を尽くしてやっていきましょう。食べ物にさせないと。宝物を食い荒らさせないと。そういう姿勢でやっていこうではございませんか。

【傍聴者3】 僕は前からとても疑問に思っていることがあります。それは、伊豆縦貫自動車道というコンセプトですね。それで、これはもう20年か30年ぐらい前からあ

って、それがどんどんできてきている。例えば修善寺近辺、あるいは月ヶ瀬近辺、それから何と天城のこちら側、逆川とか、あるいは梨本ですか、その近辺。これは僕はすごく反対ですね。なぜならば、伊豆半島の自然の優れた綺麗なすばらしい景観を、人工物がどんどん侵食していく。道路っていうのはやっぱり一番大きいインフラで、すべてを変えていく。だから風車の問題もすごい問題でしたけれども、海上洋上風車はできないと思いますが、ぜひそうあって欲しいけど、ただ道路の問題、これはどうしても無視できない。南伊豆つまり天城以南というのは、聖域ですね、聖域。つまりサンクチュアリ。例えば僕らここに、僕自身はここに50年近く住んでるんですけども、不便だから、いろいろ便利になる方がいいって思う人は多分、もちろんたくさんいることは知ってるし、そういう議論なんかで喧嘩になったりすることもあるんだけども、やっぱりかけがえのない場所、都会に近くて、海があって、山。でも山間に例えばおっきいガラガラというコンクリートの渡る道なんかできてくる。これはもう全然全く、伊豆のこのやわらかいというか何というか、良い感じのものを、がぶっと壊しているんですね。これは本当につらい。

僕は伊豆はとても好きで、ここにきて子どもも生まれて、彼らもまた子ども生んで孫ができてとかあるけれど、伊豆が変わっていかないで欲しいってすごく思うんですね。とてもそう思う。だから、伊豆縦貫自動車道というネーミングでなくて、あれは、伊豆「じゅうりん」自動車道。そういうふうに僕は命名しました。知事さんは委員長だからあまり責めたくはないけれども、僕はとても苦しいですね。そんなことです、大体。

【川勝知事】 傍聴者3さん、どうもありがとうございました。人間の原罪ですね、これは。我々は、動物、植物に人為を施したわけじゃないですか。つまり、家畜化したり、自然の雑草であるものを栽培植物に変えたりして、そして他の植物が入ってるところに田んぼを作ったり、畑を作ったりしてきたわけですね。そうしないと生きていけない。そういうのを人は文明というわけですね。狩猟採集で、自然の恵みに応じて生きてたときの、縄文一万年がですよ。体格がよかったそうです、縄文人の方が。それは木の実を採ったり、あるいは貝を採ったり、その自然の恵みのものによって生かされてるから、決して自然は変えないわけですね。ところが、その水を溜めてそこで田んぼを植えてとなってそれをだんだん広げていくと。で、水路をあちらこちらに

作ってあげれば、そうすると水路の長さだけで、4万キロぐらいありますけど、地球の4倍ぐらいある。日本人作ってきたわけですから。

ただ、おっしゃるように道路は作らなかつたですね。伊豆なんかは皆これ津々浦々ですよね。ですから船でそれぞれ連携しているということで、この山の中には、野生の種、動植物が本当に天国のように、サンクチュアリのように息づいていたんじゃないかと思います。ところが、戦争で負けて、アメリカ人のワトキンスという人がやってくる、日本は文明じゃないと、道路がないじゃないかと言ったわけです。人が歩く道だったわけです、日本の道は。それは文明じゃないと言われたもんだから、名神高速道路とか東名高速道路とかってそこから始まって、これで70年間突っ走ってきたわけですね。

そして、この間の東日本大震災の時に、東北自動車道っていうのが、東北の真ん中を、北上山地とそれからこちらの奥羽の真ん中のところを走っているんですが、国交省の人が、そこをまず瓦礫をどけて、海の方に下りていけるようにというふうに言ったんですね。そして、瓦礫を取って助けに行ったわけです。ですから、真ん中に道がなければ助けに行くことができないということがあります。今この伊豆縦貫自動車道を、命の道という人がいます。人間が生きていくために。今、伊豆半島は特にそうですけれども、海辺にへばりつくようにして町ができてきてるわけですね。これは日本の津々浦々の典型的な、津っていうのは港です。浦っていうのは海ですから、津と津を海でつなぐというのが、漢字ですけど、これは中国にはありません、津々浦々っていう漢字は。韓国にもありません。日本が作り上げたものです。日本は津と津を、つまり港を、海で、つまり船でつなぐというのが、日本の交通の体制だったわけですね。そして道路ではなくて、川にいかだを組んで物を運ぶというふうにしてきました。それがですね、残念ながら、取り返しがつかない形でもう日本では、7千万台、8千万台という車が走っています。これが排気ガスを出して自然を台無しにしていると。だから電気自動車にしようとかという動きがあつてですね、いかにして環境と道路、あるいは自動車をですね、両立させるかっていう課題に直面してるんですね。鉄道だとCO2出さないですよ。自動車だと出すと。だけど自動車だとドア・ツー・ドアで物が運べたり人が移動できるっていう、確かに便利な面があるわけです。ですから今こちらで不便だけでも、インターネットで注文すれば、宅配便で物が届いたりするという面もあります。

ですから、全部否定できないと。伊豆縦貫自動車道を否定するかどうかとなればです、私は、この南伊豆に、最低限この命の道というか、この背骨から、こういうふうにはこの肋骨が出ていくという形で、海で被害があった人を助ける、こちらから助けに来るといふ、そういう役割を持つんですよ。

ともあれですね、空港だって、私は言ったか言わないか知らないけど、要らないっていう人が大半だった。できてしまった、じゃあどうするかと。そして今、伊豆縦貫自動車道も今、下田までですね、何十年間も、人は土地を譲りますと、そして、来やすい、また出やすいようにして、伊豆の自然も守りながら、かつ、文明的なインフラも欲しいという。それこそ、明治の初めに、大久保利通と、西郷隆盛が論争しました。文明じゃ文明じゃあと言っておるがと西郷が言うわけです。あれは野蛮じゃと。勝手に工場を作ったり、金儲けたり、そして人々の生活を根本的に変えたりすると。あれは野蛮じゃと。そして家を大きく建てて、華美にして贅沢をして、何が文明じゃと、あんなものは野蛮じゃと、西郷南州遺訓に書かれていますよ。私はそれ正しいと思う。そういう精神が、傍聴者3さんに生きてるんじゃないですか。伊豆南部は守らなければいけないということに、おそらく反対する人一人もいないと思いますよ。市長さんや町長さん含めて。一方で、伊豆縦貫自動車道だとか、あるいはなんていいますか、福祉の施設でしっかりとした耐震性のあるものを作るだとか、これもまたですね、そういうものは要らないっていうところまで言う人がいないと思いますね。なかなか難しい問題を提起された。だけど、一番の基礎は、この自然ですよ。自然を根本的に破壊してしまうと、結果的には自分の墓穴を掘ることになると。だから、この自然があってこそその文明であって、文明で自然を破壊してしまうというのは野蛮なことだといふ。こういうね、哲学を持ってる人がいるっていうのは、やっぱり伊豆が、文化が高い所以なんじゃないんじゃないかと思ひますよ。

日本の国づくりの基礎は何か。これはヨーロッパの人たちに押し付けられる前に、明治元年、16歳の天皇が詔を發したわけです。五箇条の御誓文といひますが、「広く會議を興し、万機公論に決すべし」と。つまりみんなで議論して決めようと。一方の誰かが決めるんじゃないと。そしてですね、「上下心を一にして、さかんに結論を行ふべし」、「官武一途庶民にいたるまで、おのおのその志を遂げ、人心をして倦まざらしめんことを要す」といふふうには言っています。一人一人ですね、上から押し付けるんじゃないで、一人一人、嫌だなあといふふうには思わせないようにしてやっぺいこう

と言ってるわけですよ。ですから私はこういうことでやっていけばいいと。だからそういう傍聴者3さんのような意見の人があるのを押えつけてはならない。堂々と言うべきです。傾聴に値します。おそらくみんなそう思ってるんじゃないですか。だから、決して少数者じゃないですよ。だけどね、一方で、これは仕方がないなど。ここはやっぱり、伊豆縦貫自動車道は必要だと思ってる人の方が多いと思いますね。こういう人もいるでしょ。これを、もう徹底的に議論して、そこまでは譲ろうと。ともあれ、こういう伊豆のいわば大地の声を代弁してらっしゃるように思いましたね。そういう方がいると。

それとですね、利益中心の人たちには、やっぱり傍聴者3さんと、今、伊豆縦貫自動車道について反対の立場の人も、心は一つにして反対ですよ。それはね。ですから、あれかこれかっていうことだけではなくて、何とか両方両立させていこうという、そういうことで知恵を絞る良い機会じゃないかと思いますね。